

建 築

古代象形絵文字作家
竹本大亀氏による「建築」揮毫

第5回 京都建築賞 結果発表

■主 催 (一社)京都府建築士会
■後 援 京都府・京都市・宇治市
■趣旨目的

京都府建築士会創立60周年を記念して創設。京都の歴史的
文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活
動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の
継承・発展に資することを目的とする。

第4回から、次代を担っていく建築士の支援を目的として、
京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門の藤井厚二
賞を創設している。藤井厚二賞については次号で紹介。

■審査委員会
委 員 長 岸 和郎(京都大学名誉教授)
委 員 米田 明(京都工芸繊維大学教授)
平田晃久(京都大学准教授)

■受賞一覧
特 別 賞／ロームシアター京都
設計者：香山壽夫・佐伯和俊・下川太一
最優秀賞／京都産業大学 サギタリウス館
設計者：若江直生・吉野優輔・水上和哉
奨 励 賞／しづや KYOTO
設計者：多田正治・遠藤正二郎
入 選／数研出版関西本社ビル
設計者：有田 博
入 選／京都タナカ集合住宅
設計者：田中昭成・清正 崇
入 選／真宗教化センターしんらん交流館
設計者：若林 亮
入 選／西陣産業創造會館
設計者：柳楽和哉・西川 崇・佐藤大基

2017年 京都建築賞 審査総評

審査委員長 岸 和郎

京都府建築士会によって創設された賞である京都建築賞の本年度は5年目になります。その
審査の経過についてご報告いたします。

本年度も昨年度と同じく私は委員長として、また審査委員として京都工芸繊維大学大学院教
授の米田明氏、京都大学大学院准教授の平田晃久氏の3人体制で審査に当たらせていただくこ
ととなりました。

資料の提出期限である2月28日時点で応募作品数は27点であり、昨年度の14作品と比較して
大幅増になり、審査員、建築士会関係者一同喜んでいく次第です。建築士会による様々な事前
確認のプロセスを経た後、3月23日に一次審査委員会が開催されました。ここでは書類審査に
より現地審査作品を選ぶことが目的であり、様々な議論の結果、「数研出版関西本社ビル」、「ロ
ームシアター京都」、「西陣産業創造會館」、「京都タナカ集合住宅」、「しづやKYOTO」、「京
都産業大学サギタリウス館」、「真宗教化センターしんらん交流館」の7作品を現地審査作品と
して決定しました。

引き続き5月11日には、右記7作品の現地審査を行い、それぞれのクライアント、そして設
計者諸氏のご協力により無事に審査を終了することができました。

現地審査終了後、ただちに最終審査委員会を開催し、右記7作品について以下の結論を得ま
した。まず、現地審査を行った作品7点とも、十分に評価すべき水準にあることを審査員全員
で確認し、7作品を少なくとも京都建築賞入選とすることとし、引き続き賞の議論に入りま
した。

その結果、「京都産業大学サギタリウス館」を最優秀賞、「しづやKYOTO」を奨励賞、「ロ
ームシアター京都」を特別賞とすることに決定しました。

本年度の最優秀賞とした「京都産業大学サギタリウス館」については、緑溢れる京都北山の
自然の中、勾配のある山の斜面を中庭の大階段に生かすことで広場とはまた異なった形の学生
たちの空間を東西方向に展開するような形式で創り出し、さらに舞台裏となりがちなその大階
段の裏側も積極的に内部空間として生かした点、さらに南北方向へのさらなる展開が可能なの
うに将来の屋外空間が準備されている点など、自然の中に広がる大学キャンパスの新しい提案
として顕彰したい、したがって最優秀賞に値する作品である、と審査委員全員の一致した結論
を得ました。

奨励賞の「しづやKYOTO」については、いわゆる「町家の改装」ではなく特に特徴的
ではない既存の住宅建築でも、そこに現代的なデザイン手法を導入することで新しい命を与える
ことができるのを見せつけた点が新鮮であり、設計者のこれからのさらなる活躍を期待し
て、奨励賞に推挙したいと考えました。

「ロームシアター京都」については、現地で改めて建築を体験すると、それを原建物の設計
者である前川國男氏と今回の改装を担当した建築家である香山壽夫氏の時間を越えた共同設計
作品と考えるのが一番ふさわしく、そこにコラボレーションのプロセスを見るかのような
ディテールが発見でき、豊かな建築体験が可能になりました。さらにこの建築が新装なったこ
とで岡崎エリアのコアとして市民が集まる場所、憩う空間としてこの建築があらためて再生し
たことが最も素晴らしい点であると感じられました。

一つの建築が単体の建築として素晴らしいものであることを顕彰するのが建築賞の使命だと
考えますが、この「ロームシアター京都」はその与件を超えて岡崎という地域そのものを生き
生きとした公共空間へと変貌させる触媒となっており、一つの建築が持つ力の大きさをまざま
ざと見せつけたらと思います。建築として優れているのは当然として、さらにその建築が
地域の性格をも変える力を持っていることを再認識し、ここでは一般的な建築賞を超えるもの
として顕彰したいという審査員全員の気持ちから特別賞を創設することとしました。

以上で京都建築賞の審査過程と結果の報告といたしますが、本年度は審査員として充実した
時間を持たせていただいたことを応募者の方々全員に感謝していることを最後に記して、本年
度の審査報告としたいと思います。

ロームシアター京都

特別賞

設計者：香山壽夫・佐伯和俊・下川太一／香山壽夫建築研究所

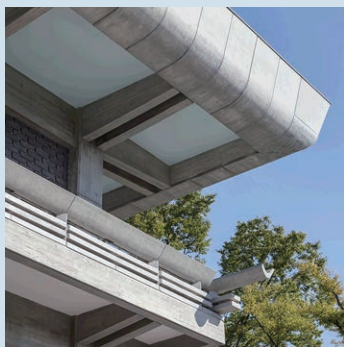


第一ホール

新たにフライタワーが増設された西側ファサードを二条橋側より見る



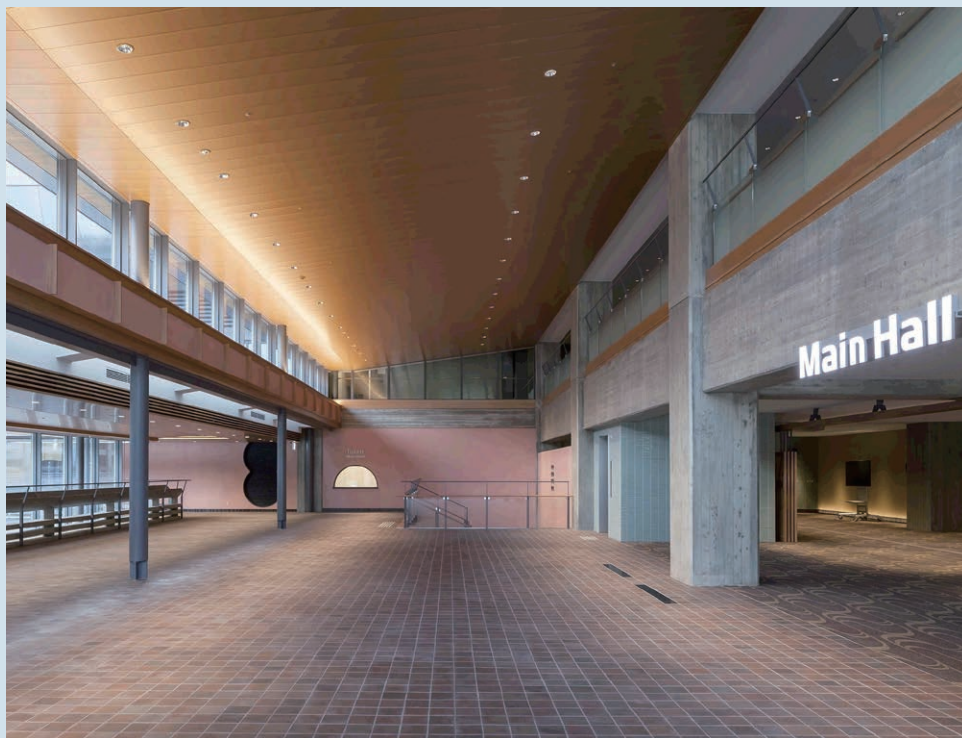
第5回 京都建築賞



改修後の南西側出隅部



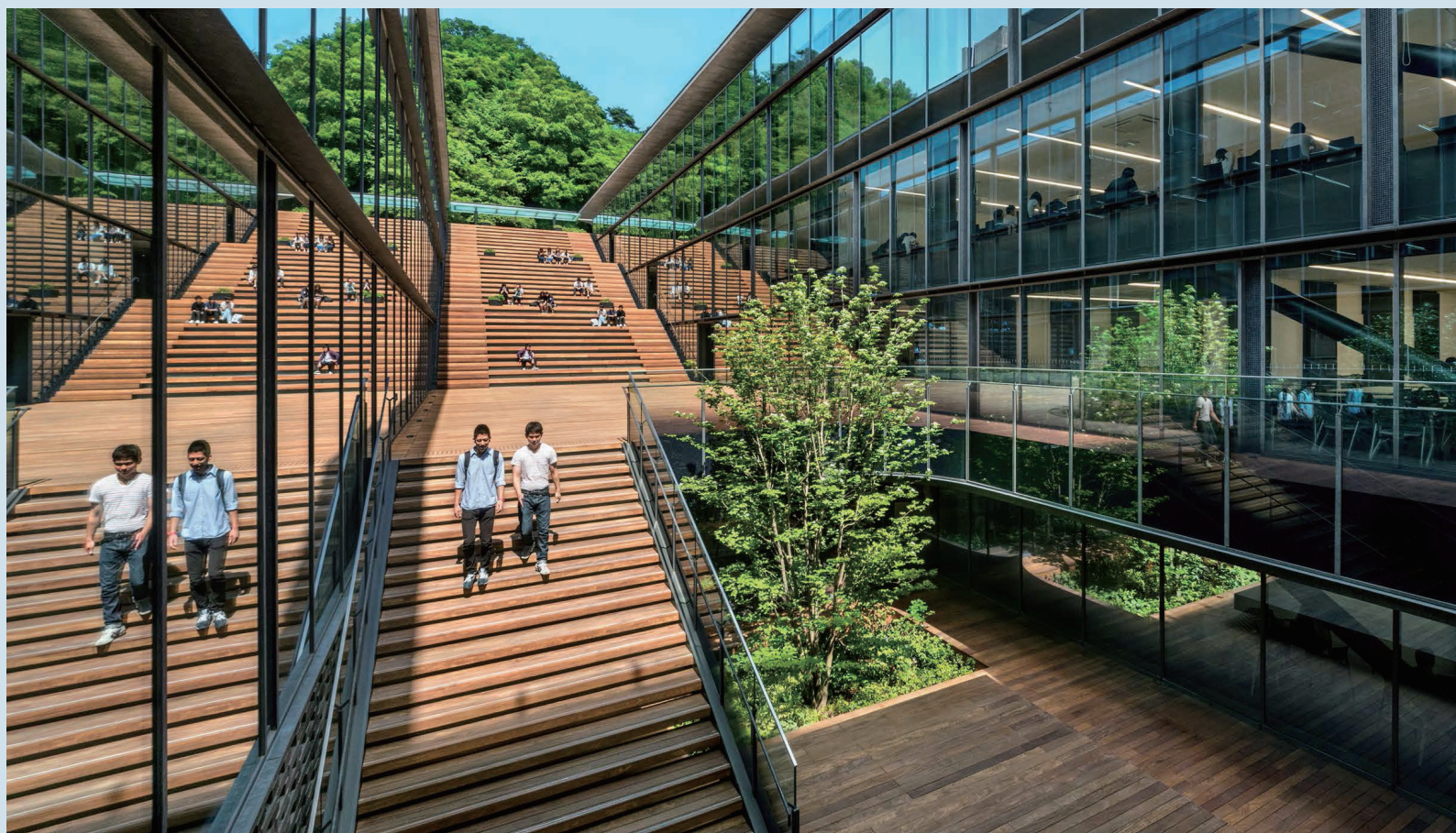
改修前の南西側出隅部



2階共通ロビー、メインホールのホワイエへと続く

所在地／京都市左京区
竣工／2016年5月
敷地面積／13,671.00㎡
建築面積／8,061.76㎡
延床面積／20,701.38㎡
構造規模／RC, SRC, S造
地上6階 地下2階建





山並みの緑や学習の様子がガラスに映し出される、大階段を核とする教育・活動の舞台

【講評】

京都市街地から北西に向かい、徐々に緑の濃くなる山際にある大学キャンパス。かなり急な傾斜地を昇り、等高線に沿ったうねったアクセス経路が展開するためキャンパスにピクチャレスクな効果をもたらしているが、実際には建設可能な平地はほとんど残っていない。今回の建築は、教室棟としてそうした斜面地の既存建物の中に挿入されている。延床面積13,000㎡、40を超える教室を収容する五層分の建築を、高さを抑えつつ計画するにはかなり厳しい周辺環境と要件であったろうと察する。

そこでとられているプランニングは、中央に斜面のプロファイルをなぞるような大階段状の光庭をとり、背後の山並を仰ぎ見る視線と反対側の船山方面を遠望する眺めを確保しつつ、その両側に平行な教室群を配置するというシンプルなものである。一見すると光庭に対して両側の教室群は左右対称のように見えるが、それぞれが光庭と反対側の既存建築との関係は異なっている。片方には上部レベルに天文台と本館棟があり、もう一方には既存校舎が取り囲む別の中庭が下部レベルにある。したがって物理的な隣接関係は非対称であり、とりわけ四層分の高さの擁壁の計画には、少しのズレをも許さない天文台が上部にあることに対し、大胆かつ細心の注意が払われたことが伺える。

階段状の光庭は、視線の抜けを持ちつつ、半ばインテリア化した落ち着いた居場所を学生たちに提供している。加えてこの階段の蹴上すき間から果敢にも内部への採光を試み、往々にしてネガティブになりがちな階段裏空間も積極的に活用している。下部レベルにある既存中庭からの空間は、グローバルcommonsという中枢となるcommonsスペースを介して、この階段裏空間へ接続されている。この巡回しつつ再度裏山へと抜ける、段状空間の



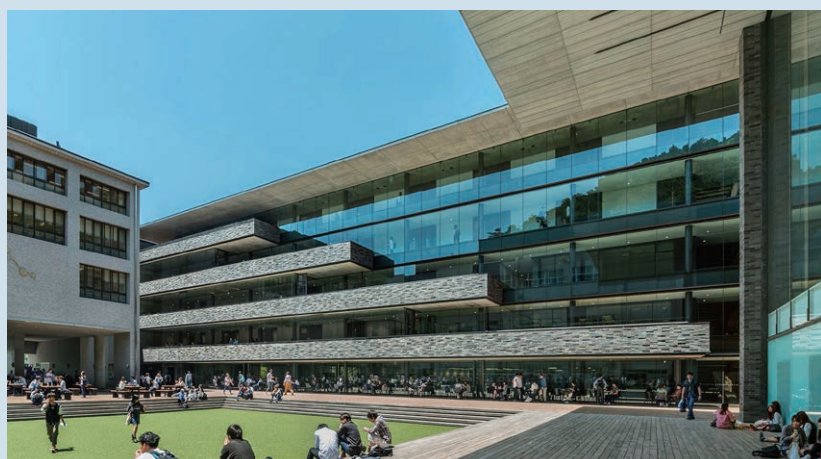
京都五山・船山への眺望を深い軒庇が切り取る



光を導くPC大階段を屋根とし自然光で明るい段状ラウンジ



階段



屋内外の居場所をつくる段状バルコニーを介し、活動が広場に溢れ出す広場側ファサード

流れは秀逸である。
ただ一つ気になった点をあげれば、正面の天文台へのアプローチとそれにからむ擁壁端部処理がもう少し整理されればよかったように思う。しかしながら総じてバランスのとれた、やるべきことをやりきった優れた建築として高く評価した。

(米田 明)

所在地／京都市北区
竣工／2016年3月
敷地面積／259,078.35㎡
建築面積／3,619.81㎡
延床面積／12,962.37㎡
構造規模／SRC,S造
地上5階 地下1階建

設計者：多田正治／多田正治アトリエ・遠藤正二郎／ENDO SHOJIRO DESIGN



OMOYA客室



OMOYA客室



HANAREリビング



アプローチ

所在地／京都市下京区
竣工／2016年5月
敷地面積／229.32㎡
建築面積／185.76㎡
延床面積／239.05㎡
構造規模／木造2階建

【講評】
清々しい作品である。
一次審査の資料を拝見して、良くできた作品だと思いつつ同時に、実際の空間は少し技巧的な感じがするのではないかと、無用な危惧を感じていた。しかし現実に訪れてみて、そんな危惧は全く的外れであることを知った。何というか、技巧的というのと正反対の、実直な判断の積み重ねによってできた、良質な空間がそこにはあった。それでいて、カプセルホテルのようなタイポロジーをさっと塗り替えるような鮮やかさも同時に漂っていた。
狭い空間というのは、生かすも殺すも建築家の腕次第である。巢にこもるような動物的本能を呼び覚ますこともあれば、単に狭げましいだけで居心地の悪い空間になることもある。そこには空間のプロポーションや開口の位置、光、素材感などの様々なファクターが関係してくる。それゆえつい技巧的になってしまいがちなのも、狭小空間の設計なのである。

る。また、町家のリノベーションというのも、技巧的なデザインに陥りがちな条件である。しかしここでは、そういうのとは無縁に、実直に丁寧に、居心地が良く、新旧が按配良く共存している空間が、きちんと作られている。建築には作者の手柄が滲み出るといって、作者たちによる現場での説明も、極めて実直で爽やかなものであった。それはどこか、良質なモダニズムの建築が持っている清々しさを感じさせた。適切な寸法の空間が、適切な素材や形で、適切な関係の中に配置される。そういう実直で透明な精神が、感じられた。そしてその同じ精神が、本体だけでなく離れや路地の設計にも活かされているようにみえた。ローコストの宿が、こんなにも細やかで、しかも爽やかさの漂うひだを生み出しているあたり、京都賞にふさわしい作品だと納得した次第である。

(平田晃久)

古代象形絵文字作家 竹本大亀氏 プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。

漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫(きこう)活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

■趣旨目的

藤井厚二賞は、第4回京都建築賞の募集に際して、新たな部門として創設し、今回で2回目となりました。この賞は幾多の実験住宅の計画を通じて、卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。本年も昨年と同様「木」をテーマとして、木造作品に拘らず、内外装仕上げに利用した計画や流通・再生に関わる提案などを広く募集しました。

■審査委員

河井敏明（一級建築士事務所河井事務所 主宰）
畑 友洋（畑友洋建築設計事務所 主宰）
森田一弥（森田一弥建築設計事務所 主宰）

■受賞一覧

（応募：13作品）

藤井厚二賞／太秦安井の住宅
設計者：奥谷繁礼
現地審査選出作品／houseA/shopB
設計者：木村吉成
現地審査選出作品／西陣産業創造會館
（旧京都中央電話局西陣分局舎）
設計者：柳楽和哉
現地審査選出作品／House of Family history
設計者：寺川 徹
現地審査選出作品／祇園の家
設計者：藤田 慶、川上 聡
現地審査選出作品／京都型住宅モデル
設計者：奥谷みわ子、奥谷繁礼、池井 健

※現地審査選出作品は順不同



南外観

【講評】

「太秦安井の住宅」は住宅街に建つごく一般的な住宅に増築を行うことにより二世帯のための住環境を作り上げたものである。今回審査において評価された最大のポイントは（元の敷地が二方で接道している等恵まれた条件はあるものの）、世代を超えて建物を継承していく為の手法のモデル、しかも木造のポテンシャルを引き出す、言い換えれば木造でしかできないモデルを示したところにある。

改修前、敷地内には母屋と離れの（共に既存不適格の）二つの建物があり、設計者は双方の建物が建ぺい率等や延焼線の問題を満足するラインで敷地を2分割した上で「1敷地1建物」の回復、離れに「またぎ増築」とでも呼ぶべき形の増築を行い、その増築によって既存不適格の離れ自体も現行基準に適合せしめようという離れ業をやつてのけている。こう書くといかにも奇抜なウケ狙いのアクロバティックなものを想像するが、全ての作業は段階を踏んで論理的に検討されており、またぎ増築という手法の選択は十分な説得力を持つ。

例えばまたぎ増築によって建築面積の増加が小さくなり上記の延焼ラインを避ける敷地分割の自由度が高まり、法規の上では既設建物の耐力を0とみなして設計されているため（実際の強度については許容応力度計算を行って確認している）、従来改修の前にはしか減築や除却ができなかった既設部分をいつまでも残す事も可能であるしいつでも取り壊す事もできるようにした。既設部分の更新は時間的には全く自由となり、親世代の要望で今回残し

設計者：奥谷繁礼／(株)奥谷繁礼建築研究所



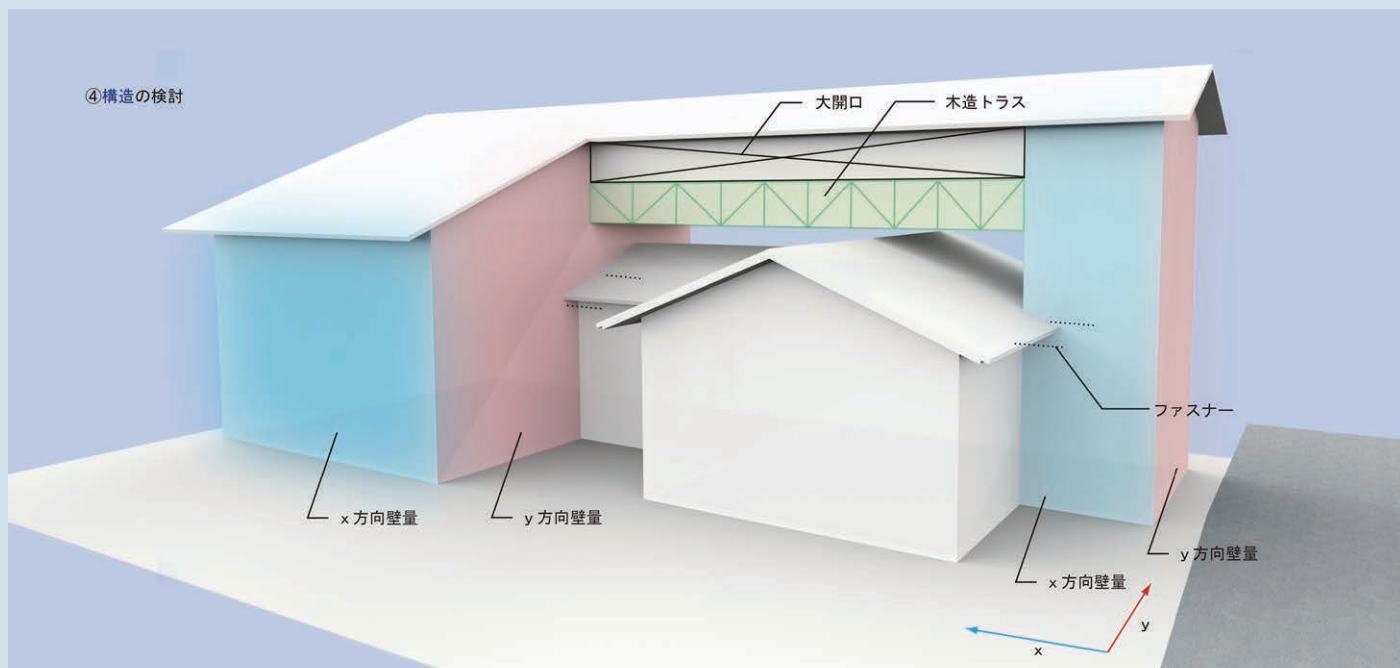
またぎ部の木造トラス



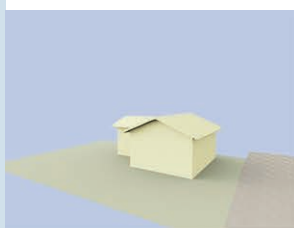
二階廊下内



既存屋根と新設の二階



⑤展開していくイメージ



既存離れ



+35年



2011年：増築 (夫婦+子供2人)



+20年



2031年：減築 (夫婦)



+10年



2041年：再増築 (夫婦+子供夫婦)

所在地／京都市右京区
竣工／2012年1月
敷地面積／321.52 m²
建築面積／127.86 m²
延床面積／225.462 m²
構造規模／木造2階建
(増築工事)

(河井敏明・畑 友洋・森田 一弥)

木造が大きな比率を占める日本の戸建住宅における「幾世代にもわたる更新を行いながらの継承」を考えたときに、この建築は使用された木材の大部分が親世代が所有する山林から伐りだされたことも含めて、「継承のマナー」確立に大きな貢献をしていると考えられ、審査員の全員一致で藤井厚二賞に選出した。

た既設部分の子世帯や孫世代が減築してピロティーとして使う事もできるし、自分たちの為の建屋を再増築する事も可能となったのである。

またぎ増築という手法が与えるこの時間的自由度は、ひいては建物の長期にわたる維持に大きな自由度を与えることになる。良い技術とは人を自由にする技術であり、またぎ増築はまさしくそのような技術なのである。また、今回の改修は木造軸組の在来構法や、集成材を用いたトラスといった既に十分こなれた技術で実現されており、社会的な広がりや先端的で特殊な技術(所謂ハイテク)を用いるのではなくこのようにいわばローテクで計画を実現した意味も大きい。

第5回 京都建築賞

藤井厚二賞 現地審査選出作品

西陣産業創造會館 (旧京都中央電話局西陣分局舎)

設計者：柳楽和哉／(株) NTT ファシリティーズ・佐藤大基／CPU

【講評】

岩本 祿（1893～1922）設計で唯一現存する京都中央電話局西陣分局舎（1921年、1～2階RC造、3階木造）の改修である。今回の改修では耐震補強とテナントの利用形態（2階コワーキングスペース、3階カンファレンスルーム）にあわせた内装改修が行われた。

建物は外観部分が重要文化財に指定されており、耐震補強は外観の変更（窓が壁となる等）が発生しないように行われ、また他にも元の通信設備用二重床（H1450）を利用して段差の有る空間構成とするなど、改修ならではの丁寧な設計が行われている。

ここで設計者が建物と向き合った姿勢、作業の方向性はストック活用が求められる現代において規範となるべきものである。設計者には更にすすめて楽しさや美しさといった価値を与えることを期待する。



所在地／京都市上京区
竣工／2016年6月
敷地面積／4,584.75㎡

建築面積／2,112.88㎡
延床面積／4,738.6㎡
構造規模／RC造一部木造 地上3階建

houseA/shopB

設計者：木村吉成／木村松本建築設計事務所



所在地／京都市北区
竣工／2016年9月
敷地面積／71.48㎡

建築面積／50.2㎡
延床面積／102.5㎡
構造規模／木造 地上2階建

【講評】

京都市郊外における職住一体型の小さな建築。おろからで特徴的な木造の架構が、強固な骨格でありながらあくまで背景として、ものであふれた状況を許容させ、内部において働くことと住むことのユニークな距離感を生み出していることに驚かされた。

それは、単に居場所を選択し、互いの目的を同居させるという機能を超え、働くことと住むことが同居することにより、それぞれが互いにより豊かな行為へと昇華され、この場所のできることに楽しさがそのまま表れているような空間であった。

日射や寒さへの対応にやや疑問が残ったが、京都郊外の今日においても、かつての町家のように、働きながら住むモデルとしての意味やその可能性について考えさせてくれる作品である。

House of Family history

設計者：寺川 徹／寺川徹建築研究所

【講評】
京都郊外の宇治市にある住宅。
過去に移築された二棟に挟まれた母屋が存在しており、その既存部分に増築する形で計画されたものである。ゆったりとした敷地内に、経歴の異なる複数棟の建築が巧みに外部空間をさしはさみながら、小さな集落のように多世帯の住居として編み込まれており、設計者が新築や改築ではないこのような方法を選択したことに魅力を感じた。
その地に根を下ろし、何代にもわたって住み続ける連鎖がそのまま形式に表れた住居の姿は、郊外における確かな住まいのあり方としてすがすがしく映った。
今後さらに、恵まれた立地を生かし、隣棟や外部空間との関係をより積極的に細やかに取り入れていくことによりさらに豊かな住まいとなることを期待したい。



所在地／宇治市
竣工／2015年12月
敷地面積／1,708.29㎡
建築面積／62.87㎡
延床面積／62.87㎡
構造規模／木造 平屋建

祇園の家

設計者：藤田 慶／フジタケイ建築設計室・川上 聡／SATOSHI KAWAKAMI ARCHTECTS



所在地／京都市東山区
竣工／2017年2月
敷地面積／376.86㎡
建築面積／39.54㎡
延床面積／39.54㎡
構造規模／木造 地上2階建

【講評】
京都市東山区の住宅密集地における既存建物を増築および改修した建築である。陶芸の工房として使われている増築部分は、既存建物の柱を挟むように取り付けた梁が規則的に並ぶトンネル状の空間である。不安定な既存建物の構造を安定させることを前提に、それらを補強しつつ新たな空間を生み出すというシンプルながら、根本柱の梁がリズムカルに繰り返される特徴的な空間を生み出している。ダイニングキッチンとして使われている既存の土蔵を改築した部分は、既存の柱の並びをそのまま踏襲しつつ、外壁位置を外側に迫り出させることで室内空間を拡張し、元は蔵の内部だったとは思えない気持ちの良い出窓空間が生み出されていた。暴力的に切断された既存の梁など、既存の空間や構造との不合理的な関係性ももう少し空間に現れても良いのではと思わされる部分もあったが、ディテールに至るまで丁寧に設計され、施工された清々しい作品であった。

京都型住宅モデル

設計者：奥谷みわ子・奥谷繁礼／(株)奥谷繁礼建築研究所・池井 健／池井 健建築設計事務所

【講評】
コンペティションの最優秀案として選ばれ、現代の京都におけるモデル住宅として建設・販売された建築である。設計者が京都の街区のありうべき姿と考える、街路に沿って建物を配置し、街区を中心に設けられた庭を連担させる、という理念に基づき、近隣と軒を連ねるようにして建物が配置されている。格子や庇など町家の基本的なエレメントは踏襲しつつ、ファサードから飛び出している三つの界壁が建物の外観を特徴付けているが、これらは120×450断面の集成材壁柱を隙間なく建て並べることで、構成された木造集成壁であり、構造や防火など複数の機能を担うと同時に、将来の改変へのフレキシビリティを担保するという工法的な提案も含まれている。現地審査においては、事情により住宅の内部や奥の庭の様子を拝見できなかったのが残念であったが、完成から10年近くを経て外観が古びることもなく、良好な状態に保たれていたことも深い印象を与えてくれた。



所在地／京都市東山区
竣工／2007年4月
敷地面積／121.72㎡
建築面積／71.5㎡
延床面積／131.3㎡
構造規模／木造 地上2階建